

粘土を採掘した遺跡

あし くち
芦ノ口遺跡の調査成果から

東北大学埋蔵文化財調査室

東北大学電子光理学研究センターがある東北大学富沢地区。実は、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡の上にあることをご存じでしたか。電子光理学研究センターは、芦ノ口遺跡という遺跡の中にあります。

そのため、新しく建物を建てる時、水道・ガス管などを改修する時、地表面を掘る工事をする前には、必ず発掘調査をして、遺跡の状態を記録保存しています。

芦ノ口遺跡は、これまで大小11カ所の発掘調査をしてきました。その結果、他の遺跡とは少し異なる、芦ノ口遺跡の特徴がわかってきました。

芦ノ口遺跡の土（堆積層）は、良質な粘土層があり、縄文時代・古墳時代に土器を作るためなど、粘土を採掘した穴（粘土採掘坑）がいくつも発見されています。



芦ノ口遺跡第10地点（北西から）

2013年に、電子光理学研究センター研究棟の増築のために行われた発掘調査地点から、南東側にある三神峯公園を臨んだところ。



芦ノ口遺跡出土の縄文土器

縄文時代晩期の“亀ヶ岡式土器”と呼ばれる土器です。彫刻のような細やかに連続する文様がみられます。植物のシダの葉のような模様であることから“羊歯状文”と呼ばれる文様で、この時期の土器に特徴的なものです。



湿ったクッキーのような脆い状態で出土します。下の土を台座状に残し、土ごと取り上げます。



土器をキムタオルなどで養生し、発泡ウレタンが直接付かないようにします。急激に乾燥しないように、時々、霧吹きで湿らせます。



養生した土器の上にウレタンをいれ、台座にした土部分を切り離します。この塊ごと調査室に持って行き、逆側から台座の土を丁寧に取り除きます。

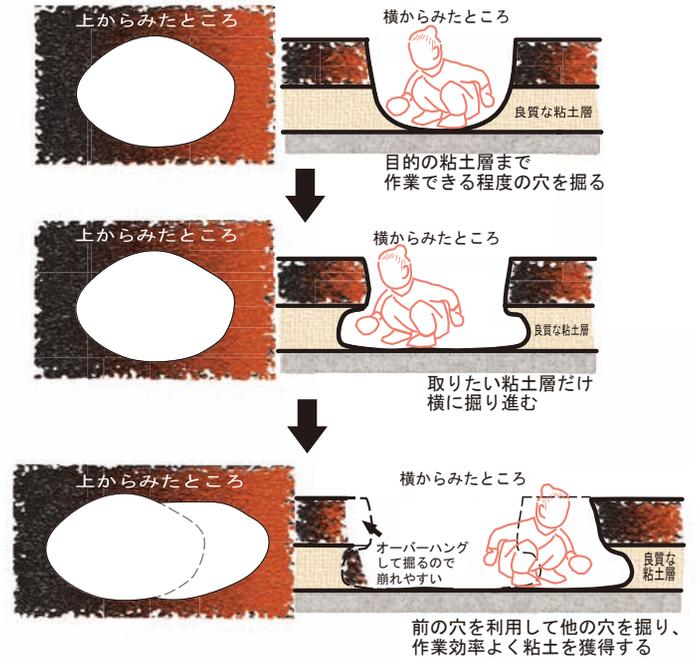
地盤が粘土質で地下水を帯水しやすいためか、芦ノ口遺跡の土器は、溶けたように脆いものが多いです。そのため、遺物を取り上げる時には、発泡ウレタンでパックして壊れないようにし、土ごと掘り出して、調査室に持ち帰ってから室内で丁寧に土をはずして、土器が破損しないような方法を使うことがあります。手間と時間は掛かるが、土器の文様などの貴重な情報が損なわれないための大事な作業です。

ねんどさいくつこう
縄文時代の粘土採掘坑



縄文時代晩期の人たちが、土器を作るための粘土を掘った穴です。不整形な穴が不規則に並んでいます。穴の深さはおおよそ同じで、良質な粘土の層だけを狙って掘っていることがわかります。

粘土の採掘法の模式図



粘土層の断面図



粘土層の下からは、埋没林が発見されました。根株や倒れた幹などの樹木が、一面に生々しい状態で保存されていました。トウヒ属とカラマツ属の混在する亜寒帯生針葉樹林であることが判明しています。遺物などの人間活動の痕跡は発見されていません。炭素安定同位体比分析の結果、最終氷期の前半かそれ以前に形成されたものと考えられます。

粘土層より下層で発見された埋没林



ねんどさいくつこう
古墳時代の粘土採掘坑



古墳時代の粘土採掘坑は、縄文時代の粘土採掘坑よりも上の層にある粘土を採集しており、下層にある良質な粘土層までは到達していません。縄文土器に適した粘土と、土師器（古墳時代の土器）に適した粘土の質が違う可能性、あるいは土器作り以外の目的で粘土を取った可能性など、いくつかの理由が考えられます。



周辺の土と色の違うところが、古墳時代の人々が掘った穴の跡（土坑という）です。周辺の自然の土と色が違うのは、この穴が埋まった時に、色や特徴の違う土が入るからです。発掘調査では、土の色や混ざり具合、特徴などを注意深く観察しています。

沢状の落ち込み



西から東に向かって沢幅が広がっています。沢の中から、平安時代の土師器が出土しており、古い時代に埋まっていることがわかります。昔の地形をとらえることができました。

東北大学埋蔵文化財調査室ウェブサイトはこちら→
<http://web.tohoku.ac.jp/maibun/>
 各調査地点の詳しい成果は、『東北大学埋蔵文化財調査年報』、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』にまとめてあります。東北大学附属図書館で閲覧できます。東北大学機関リポジトリからダウンロードできます。
<http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/>
 全国遺跡報告総覧からダウンロードもできます。
<http://sitereports.nabunken.go.jp/ja>